



HIROTTA KOINU
GA KERUBEROSU DESHITA

拾った子犬が ケルバスでした

～実は古代魔法の使い手だった少年...

本気出すとコワい(?)愛犬と

楽しく暮らします～

4
vol.

Arai Ryoma
荒井竜馬

主な登場人物

MAIN CHARACTER

・ドーア・

ヒュゴの取り巻きの冒険者。騎士に憧れを持ち、ヒュゴに心酔している。

・ヒュゴ・

マントが特徴的な騎士。騎士になったソータたちに対抗心を燃やす。

・グスマン・

最近王都で台頭してきた伯爵。怒りっぽく気難しい性格。

・ソータ・

失われた『古代魔法』の使い手の少年。現代魔法よりも高度な理論で、魔法を自在に操る。

・ サラ・

剣のみで戦う『純剣士』の女性。卓越した剣技を誇り、パーティの前衛として活躍。

・ケル・

地獄の番犬ケルベロス。見た目は可愛い子犬だがなかなか武闘派。時折その残虐性が垣間見えることも……

1 輪廻転生と餓鬼の群れ

輪廻転生——生命は滅ぶことなく、六道と呼ばれる六つの世界に転生し続けると言われている。天道、人間道、修羅道、畜生道、餓鬼道、地獄道。以前ソータと緑鬼の戦いの最中、人間道と地獄道を繋ぐ門が開かれそうになった。その門の近くにある祠の前には、極端にやせ細っているのに腹だけがふっくらと膨らんだ男たちがいた。

くばんだ目元にきょろっとした瞳。禿げ上がった髪は両サイドしか残っていない。明らかにこの世の者ではない彼らは、辺りを見渡して口を開く。

「な、なんだこの姿は!? 醜い、あまりにも醜い!」「腹減った、喉渴いた、眠い、悲しい、腹立たしい……くそつ、なんで俺がこんな目に!」「ど、獄卒は!……い、いない?」

男たちは自身の外見や、満たされない欲を前に困惑している。

人々、彼らは罪人として地獄で業の報いを受けていた。そして業が尽きたのちにも醜い欲望を持ち続けたがために、欲望が満たされることのない世界——餓鬼道に転生することになっていた。し

かし、縁鬼とマーカスの手によつてイレギュラーに地獄の門が開かれてしまつたため、転生中の男たちの魂は人間道に迷い込んでしまつていた。

彼らの中で、ひときわ体の大きな餓鬼が口を開く。

「昔、獄卒の鬼が地獄道に似た餓鬼道という場所があると言つていた。そこに墮ちた者はひどく醜い姿をしていて、餓鬼と呼ばれるらしいが……まさか、今の俺たちがその餓鬼なのか？ ここが餓鬼道なのか？」

大きな餓鬼はそう言つて、不安げに辺りを見回す。すると、周囲にいた餓鬼が眉をひそめた。

「でも、聞いてたほど荒れ果ててゐる場所じやないぞ」

「弱肉強食ばかりの畜生道でもなさそうだし、戦いばかりの修羅道つてわけでもない。となると

……」

「もしかして、人間道じやなしだ？」

そんな餓鬼の言葉を聞いて、餓鬼たちはフツと沸く。

本来、輪廻転生時に前世の記憶はなくなるはずだが、イレギュラーな転生をした男たちには、前世の記憶が残つていた。そして、前世に地獄で受けた苦行の反動と、満たされることのない欲を抱き続ける餓鬼としての性質が重なり、今の彼らは普通の餓鬼以上に欲に飢え、欲に忠実に生きる化け物となつていた。

一体の餓鬼は嬉しそうに笑みを浮かべる。

「それならやることは決まつた！ 街を襲つて欲望といつ欲望を全て叶^{かな}えてやるー！」

しかし、すぐに一体の餓鬼が頭を抱えてうずくまつてしまつた。

「待て！ そんなことをすれば、また捕まるぞ！ もう拷問を受けるのはこりగりだ！」

カタカタと震える餓鬼の姿を見て、他の餓鬼たちも獄卒に受けた拷問を思い出し、震えだした。別の餓鬼がハッと顔を上げる。

「人間に命令して食い物や酒を持つてこさせよつー！ そうだ、それがいいー！」

「いや、どうやってやるんだよ！」

そんなやり取りをしている中、また別の餓鬼が頭をバリバリと搔きむしっていた。

「くそつ！ 欲を全て叶えている奴が憎い！ 憎い、憎い！ 権力のある奴はもっと憎い！ 殺してやる、殺して……ころ、して？」

すると、頭を搔きむしっていた餓鬼は目をぱちぱちとさせて、頭を搔く手を止めた。それから、その餓鬼は自分の足元にあつた水溜まりを食い入るように覗き込んだ。

「見える……見えるぞ！ 薄汚い権力に執着した人間の姿が見えるー！」

餓鬼が覗き込んでいる水溜まりには、どこか別の場所にいるグスマントいう貴族の姿が映し出された。グスマントは呪物を片手に、呪文のような独り言を呟いていた。

他の餓鬼たちが水溜まりの映像に群がつてきた。

「おい、俺にも見せろよー！」

「俺にもだ！　お前だけ楽しい映像を見てるのはずるいがー！」

なぜ餓鬼が、離れた場所にいるグスマンの姿を水溜まりに映し出すことができたのか。それは餓鬼が自身の業の種類によって、さまざまな特殊能力を持つからである。権力を羨み憎むこの餓鬼は、大きな権力を持つ貴族の生活を盗み見ることができることができる能力を得たのだ。しかし、あくまで盗み見ることしかできず、権力を持つという欲が満たされることはない。

水溜まりに映し出された貴族は、笑い声を漏らして「ヤリとす」。『くくく、これでまた邪魔者を一人消すことができる…』の呪物があれば、俺に敵などいなさい。』

餓鬼たちはそんな彼の言葉を聞いて、ワイヤードと盛り上がり上がっていた。

「呪物？　そんなものがあるのか！」

「俺も欲しい！　それを使って、あの獄卒の鬼どもを呪い殺してやるー！」

そんなふうに餓鬼たちが盛り上がりを見せていると、突然水溜まりに映っている男が悲鳴を上げた。

『ああああ！！　嘘だろ！　壊れやがった!!』

グスマンはビビの入った呪物を見て、頭を抱えた。そんな声を聞いて、餓鬼たちは「ヤニヤ」と笑みを浮かべている。

「おい、見ろよ！　こいつ大事にしていた呪物を壊したぞ！　ギャハハハッ！」

「馬鹿すぎや〜！　もっとじつつの馬鹿なところが見たい！　見せる、見せる！」

餓鬼たちは手を叩いて笑って、グスマンを馬鹿にした。

すると、一体の餓鬼がニヤッと笑って呟く。

「……こいつを使ってやろうぜ。欲深いこいつを使って、俺たちの欲を全て満たそう！」

「でも、どうやって接点を持つ？　何も手掛かりがない状態でこいつを捜すってのか？」

餓鬼たちが頭を悩ませていたと、そのうちの一體が他の餓鬼たちをどかして、水溜りの正面に座り込んだ。そして、その餓鬼は水溜まりに向かって両手を向けた。

「何するんだよ！　見えないだろー！」

「お前だけいいところ見るつもりかよ。するじぞー！」

水溜まりの正面に座り込んだ餓鬼は、周囲の声を無視して両手に力を込める。すると、水面が小さく波を打つた。

『男よ、俺の声が聞こえるか？』

『うわあ！　なんだ、急に変な声が聞こえてきたぞー！』

グスマンは突然聞こえてきた声に驚き、みっともない声を上げた。

グスマンにテレパシーを送った餓鬼は、自分の言葉を世界に届けたいという欲望が強かつた。自分の考えが誤っているとも極端だとも思わず、常に自分が正しいと考えており、どんな手段を使つても自分の声を届けたいと願うがあまり、テレパシーという特殊能力を得た。そして、その代償と

して声帯を失い、テレパシー以外で声を届けることができなくなっていた。

やり取りを見ていた餓鬼たちがワッと盛り上がる。

「おおっ！ 水溜まり越しに会話ができるようになったぞ！」

「おい、聞こえるかクソ人間！ おい！ 返事をしろ！」

「俺たちの声は聞こえていないんじゃないかな？」

餓鬼たちがそんなことを話していると、その声が聞こえていないグスマンは、腕を組んで考え込む。

『……もしかして、壊れた呪物から出てきた悪魔的な奴か？ 無意識のうちに俺が悪魔の封印を解いたのか？』

グスマンは勝手に勘違いをして、ふつぶつと独り言を漏らす。それから、天井を見上げて両手を広げた。

『悪魔よ！ 俺はまだまだ権力が欲しい！ そのためにも、邪魔な貴族どもを呪う必要があるんだ！ 手を貸してくれないか！』

餓鬼たちはグスマンの真剣な表情を見て、噴き出してゲラゲラと笑う。

『くくっ、悪魔だつてよ』

「俺たちが餓鬼だつて知らないんだろ」

「使えるな、このアホな男は」

そんな言葉を聞いて、グスマンにテレパシーを送った餓鬼も笑う。

『俺たちの欲を満たせるのなら、力を貸してやるつ』

『俺たち？ もしかして、何体もの悪魔の力を手に入れてしまったのか。安心してくれ！ 金なら腐るほどある！ 女も馳走ちそうも酒も用意しよう！ 全ての欲望を叶えることを約束しよう！』

そんなグスマンの声を聞いて、ひときわ体の大きな餓鬼がニヤリと笑う。

「……交渉成立だ」

こうして、餓鬼は欲を満たすための駒こまを手に入れたのだった。



騎士の位くらいの授与式に来るようなどいう通達を受けて数日後。

俺——ソータは冒險者ギルドの応接室で、授与式に向かう馬車が来るのが待っていた。

俺、ケルベロスのケル、純剣士のサラさんは地獄の門からやってきた緑鬼を倒し、マーカスによつて開かれた地獄の門を奈落タルタロスに空間転移させ、地獄の者の侵攻を食い止めることに成功した。

そんな功績を称えて、俺とサラさんは騎士の位を授与されることになつたらしい。俺は王国から

届いた授与式に関する手紙を読み直して、眉尻を下げる。

「なんか未だに信じられないですよ」

するど、隣に座るサラさんが頷いて俺を見る。

「そうだね。まさか、私が騎士になるなんて想像もつかなかつたよ。少し前まで『時代遅れ』って蔑さげすまれていたのにね。これもソーラのおかげだよ。ありがとう」

そう言つて、照れたように笑みを浮かべた。

サラさんは俺と出会うまで、魔法を全く使わずに戦う純剣士であることを馬鹿にされてきた。剣士は剣士特有の魔法を使つて戦つた方が強い——そんな認識が一般的であり、魔法が使えないサラさんは「時代遅れ」だと言われてきた。

しかし、その認識は間違つており、実はかつて剣の腕を極めた純剣士が最高位とされ、彼らに並ぶため、剣士たちが魔法を使い始めたとのことだつた。つまり、俺の支援魔法がなくとも、魔法に頼らず戦えるサラさんは十分に強い剣士だつたのだ。

「いえ、サラさんの元々の実力ですよ。俺は支援魔法を使つているだけですし」

「ふむ。古代魔法使いのソータと、純剣士のサラがパーティを組んでいるのだ。騎士の位を貰もらうこどくくらい当然だろ？」

すると、ケルは俺の膝の上で横になりながら顔だけを上げる。俺が頭を優しく撫なでると、ケルは心地よさそうに目を細めていた。

そのあまりにもリラックスした姿勢と、子犬のような見た目のせいで忘れそうになるが、ケルは地獄の門番のケルベロスなのだ。いたずらをしそうに地獄を追放されてしまつたらしいんだけど、

地獄の門番としての恐ろしさは皆無かいむで、見た目はあまりにも子犬そのままだ。

そして、実のところ俺も二人と同じように少し普通ではない経歴を持つている。古代魔法といつて、今では使い手がいない、強い威力の魔法を使うことができるのだ。まあ、逆に普通の現代魔法が使えないんだけどね……

そんなふうに、俺たちのパーティは色々なところから追放されたメンバーが集まつていた。三人で色んな事件を解決してきて、冒險者ランクもB級に上がり、今度は騎士の位を貰うことになつた。ケルがずっと言つていた「成り上がり」に着実に近づいている気がする。

すると、ケルが何かに気づいたように体を起こした。ケルの視線を追うと、正面に座るギルド職員のエリさんと、ギルド長のハンスさんがソワソワしていた。

俺はいつも様子が違う二人を見て頬を搔く。

「えつと、なんで二人まで緊張してんですか？」

すると、ハンスさんが腕を組んで俺たちを見る。

「こんなふうに授与式に行く冒險者を送り出すのは初めてだ。さすがに、いつも通りというわけにもいかんだろ」

「そうですよ！ むしろ、ソータくんたちが緊張しなすぎなんですって！」

エリさんが体を前のめりにしてそう言うと、隣でハンスさんが頷く。

「普通、冒險者が騎士の位を貰うことはない。いくら実力があつても、上位の冒險者として扱われ

るだけだ。まあ、国を救うだけの実力を示せれば別かもしないが」

ハンスさんはそこまで言うと、俺の方にちらっと視線を向けてきた。

「国を救うだけのつて、さすがに大げさな気が……」

「大げさではないぞ、ソータ。緑鬼だけならまだしも、地獄の門が開け放たれたら人間界は終わつ

ていたかもしれん」

俺はケルの言葉を聞いて、少しだけ複雑な気持ちになる。

「確かにそうかもしれないけど……あれって俺の力つていうか、ハーデスの力を借りただけなんだよね」

地獄の門を奈落タルトロスに空間転移エーリングできたのは、地獄の長であるハーデスが一時的に俺に力を貸してくれたからだ。正直、ハーデスの力なしでは地獄の門をどうにかすることはできなかつただろう。

俺がそう考えていると、ケルが当たり前のことと言ふような顔で口を開く。

「それでも、普通の人間にハーデス様の力を扱うことはできん。実質、ソータが世界を救つたのだ」

「そう、なのかな？」

俺が素直に頷げずにいると、正面に座っているエリさんが笑みを浮かべた。

「そうですよ。胸を張つて授与式に行つてきてください！」

「そうだな。ソータにはそれだけの実力がある。むしろ、ハーデスの話を正直に出したら、それに大混乱を引き起こすかもしれないぞ」

ハンスさんは頷いてから、微かすかに目を細めた。俺はその言葉を聞いて、顔を引きつらせる。

「それは困りますね。確かに、素直に騎士の位を貰つてしまつた方がよさそうです」

ハーデスに助けてもらつたと言つても信じてもらえないだろうし、信じてもらつたらそれはそれで大事になりそうだ。

俺がそんなことを考えていると、応接室の扉がノックされた。そして、開かれた扉の向こうから、冒険者ギルドの職員の女性が顔を覗かせた。

「ソータくん、サラさん！迎えの者がお見えになりました！」

すると、その声を聞いたケルは機嫌よさげに戻尾レバをフリフリとさせる。

「ソータ、サラよ。それでは、行こうではないか」

サラさんはそんな可愛らしいケルの後ろ姿を見て笑みを浮かべる。

「ふふっ、ケルも嬉しそうだね」

「そうですね。でも、なんだろう……ただ俺たちが騎士になることを喜んでいるわけではない気がします」

俺はいつになく嬉しそうなケルを見て、かなり強い既視感を覚えた。それは、ケルが自身の大好物の恩か者を見つけたときに見せる表情だった。

「大げさではないぞ、ソータ。緑鬼だけならまだしも、地獄の門が開け放たれたら人間界は終わつていたかもしれん」

ケルは小走りで応接室の扉の前まで行くと、ニパツとした笑顔で振り向く。

「騎士の授与式には見届け人として、貴族も参加するのだろう。それならば、権力欲しさに愚かなことをしている者がいるかもしれない！ 今から楽しみだな！」

ケルは目を輝かせて、嬉しそうにそんな言葉を口にした。どうやら、俺の既視感は間違つていないうようだった。さすがに、授与式にケルを喜ばせるような愚か者が来る気はない。それでも、こういうときのケルの勘は結構な確率で当たるんだよね。

俺は少しの不安を抱きつつ、サラさんと共に迎えの馬車に乗つて、授与式の会場へと向かつた。授与式が行われる王都までは、馬車で一週間ほどかかるとのことだった。御者の話では、途中で休憩を入れつつ移動をするらしい。

俺が窓越しに揺れる景色を見ていると、正面に座るサラさんが思い出したように口を開く。「ソータはハーデスの力を使つた後、しばらく寝込んでいたんだろう？ あの後体調を崩すことはなかつたかい？」

「ああ、そのことですか。それでしたら、もう大丈夫ですよ」

俺はサラさんを心配させまいと笑つてそう答える。

ハーデスの力と知識の一部を借りて地獄の門を奈落タルタロスへ空間転移させた後、俺はすぐに気を失つてその場に倒れてしまった。当然と言えば当然だ。ハーデスの力を普通の人間が使って、なんともないはずがない。その後十日ほどゆつくり休んだこともあり、幸い後遺症こういしじょうのようなものは何も残らなかつた。

かつた。

サラさんは胸を撫で下ろす。

「そうか。何もないならよかつたよ」

「……えつと、正確には何もないことはないです」

「え、どこか痛むのかい？」

俺が少し言い淀よどむと、サラさんが心配そうに顔を覗き込んできた。

俺は慌てて手を横に振る。

「いえ、心配するようなことではないですよ！ 体の方は問題ないんです！」

「どういうことだい？」

サラさんが首を傾げると、俺の膝の上にいたケルが顔を上げる。

「ハーデス様の力と知識が一部、まだソータに残っているらしいのだ。本来、人間が手にすることができないほどの魔法の技術がソータの体にあるということになる」

俺はケルの言葉に頷く。ハーデスの力を借りて地獄の門を奈落タルタロスに「空間転移」したとき、俺の頭には自分の知らない魔法に関する知識と技法が流れ込んできた。時間が経てば薄れていくものばかりだと思つていたけど、いつまで経つてもそれらの知識と技法が頭から消えることはなかつた。

サラさんはそんなケルの言葉を聞いて、目をぱちぱちとさせる。

「……それって、かなり凄いことなんじゃないのかい？」

「上手く使いこなせるようになればですけどね。理論はなんとか噛み砕いて頭に入れましたけど、まだ実践できなくて」

騎士の位を貰うことになつてからの数日間、慌ただしかったこともあり、修業をする時間が取れずにいた。それだけに、まだハーデスの力を上手く扱える自信がないのだ。

「力を使いこなすには時間がかかりそうです。ただ新技を覚えるのとはわけが違うそうですし」

俺はそう言つて、眉尻を下げる。

「どうか、本当に使えるのかさえもまだ分からんんだよね。」

すると、ケルがびくんっと反応して窓の外を見た。俺も釣られるように『魔力探知』の反応があつた方を見ると、ケルがニットと笑みを浮かべる。

「ソータよ。それならば、この機会に試し撃ちしてみてはどうだ?」

「そうだね。ちょうどいいかも」

俺たちがそんな会話をしていると、サラさんが俺たちの視線の先を見る。

「魔物かい?」

「はい。魔物が一体来ています。結構な速度ですね」

すると、御者の男性も魔物の接近に気づいたようで、慌てて馬車を停めた。

「つ! ソータ様、サラ様。少し馬車を停めます!」

御者は魔物が向かってくる方角を見てから、俺たちの方を振り向いた。

「魔物が接近しているようです! 護衛^{ごえい}が魔物を倒すまで、安全に配慮して馬車を停まらせます!」

「護衛? そつか、護衛さんがいるんだっけ?」

俺が魔物と戦う気満々でいると、窓のすぐ近くを武装した国家騎士団に所属する兵士の男たちが通つていつた。すっかり忘れていたが、授与式の迎えの馬車には護衛がいるんだつた。俺は窓から顔を出して、隊列を組もうとしていた騎士団の男たちに言葉を発する。

「すみません! 魔物の相手、俺たちにやらせてもらえませんか?」

「え!? い、いえ、そういうわけにもいきませんって!」

騎士団の男は俺の言葉を聞いて、驚きながら手を横にぶんぶんと激しく振つた。

すると、御者の男性も眉尻を下げて口を開く。

「ソータ様、彼らにお任せください。彼らも護衛を任せられるだけの力のある者たちですから」

俺は申し訳なさそうに断る一人を見て、少し考える。この人たちも仕事で護衛を任せられたのだから、簡単に引くわけにもいかないつて感じなんだろうな。

俺は近づいてくる魔物の魔力を感じつつ、両手を合わせて頭を下げる。

「試したいことがあるんです! 危険だと思つたら、すぐに入つてきてもらつていいので、少しだけ魔物の相手をさせてください!」

騎士団の男は慌てて口を開く。

「あ、頭を上げてください! これから騎士になるつて人に、頭下げさせたら色々とまずいで

しょ!

俺は騎士団の男の慌てぶりを見て、目をぱちぱちとさせる。

もしかして、騎士って結構敬^{うやまつ}われるのかな？俺はそんなことを少し考えてから、騎士団の男に頭を下げる。騎士団の男は唸^{うな}り声を漏らしてから続ける。

それから、おまかせです！」
魔物の相手はお任せしますって！」

大正二年九月二日

急いで馬鹿を防ぐぞ。『魔物抄』は反尻のあこが魔物の姿を初めて研究でことりて、紫色の翼と長い首、爬虫類を彷彿させる鱗に鋭い爪。以前、サラさんとパーティを組んで間もなく、二匹、このゾンビの保護部で戦つところからくるワイヤーだ。

む？　スンスンツ

アハ、どうだしたの？

げる。

いや、氣のせいかも知れんな

飛び方がおかしい！あの勢い……馬車にそのまま突っ込んでくるつもりだ！」

騎士団たちの声を聞いて、俺は向かってくるワイバーンに視線を戻す。

ワイバーは制御を失ったような飛び方で、俺たちに向かって突っ込んでいた。そのまま近くにある大岩に衝突するかと思ったが、寸前で制御を取り戻してこちらに勢いよく飛んでくる。サラさんが剣を引き抜いて俺の隣に立つた。

ソリタリ
どうするつもりたい?】

といおうて、ハニカムの方の一音を詠してみ

分かつた。後ろは任せ

サテきんは頷くと
一步下がってケルと並ぶ。

タリはそんなヤツのアをせぬ

卷之二

俺はそう言つてから、向かってくるワイバーンへ右手を向けた。一人にはすでに吉

いるし、一人の実力から考えると少しへまをしてもカバーしてくれるはずだ。

俺はこれから使う魔法のイメージを強めた。頭の中で想像するのは、地獄の門を奈落に転移させたときに使つた『奈落の門』。

と同じ要領で、ワイバーンを空間転移させることはできるはずだ。多分、ワイバーンの翼だけを転移させることができれば、ワイバーンは翼を失い、体を地面に叩きつけることになる。これだけの勢いがあるのだから、ただでは済まないだろう。

俺はそう考えて、照準をワイバーンの翼の動きに合わせて息を吐く。それから、『奈落の門』を使つたときのように魔法を発動させた。

「『空間転移』……ん？」

すると、エメラルドグリーンの魔法陣がワイバーンの後方にある大岩の真下に展開された。

「あ、あれ？ なんであんなところに？」

「この魔法……」

ケルが大岩の方を見て何かを呟くが、魔法陣に囲まれた大岩は特に何も起きない。ワイバーンが接近してくる中、サラさんが剣を構えたまま俺の隣に並ぶ。

「ソータ、どうする？」

「すみません、失敗したみたいです。ケル、サラさん！ すぐにワイバーンの対処をお願いしても

俺が一瞬サラさんの方を見たところ、俺たちの後方にいた騎士団の男と御者が驚きの声を上げた。

「うわっ、大岩が現れたぞ！」

「これが、ソータ様の魔法なのか！」

大岩が現れた？ 一体何を言つているのだろう、と思つて視線を戻した俺は目の前に広がる光景に目を見開く。

「え!? なんで遠くにあつたはずの大岩が目の前に？」

俺たちの十数メートル先には、さつきまでそこにはなかつたはずの大岩があつた。御者たちは俺が魔法で岩を出現させたかのよう言つているが、土系統の魔法なんて使つていない。

一体、何がどうなつてるんだ？

「ガアアアアア!!」

すると、突然現れた大岩に何かが衝突した音と、ワイバーンの悲鳴が聞こえてきた。それから少しして、何かが地面に打ち付ける音と、ワイバーンの情けない声が漏れてきた。

「ガア……」

もしかして、突然現れた大岩に体を強打させて死んじやつた？

「どれ、我が様子を見てこようではないか」

ケルは小走りで大岩の後ろまで行くと、驚くような声を漏らした。

「おおっ、頭の骨が粉々に砕けている」

ケルはそんな言葉を漏らしてから、すぐに俺の所に駆け寄ってきた。そして、上機嫌に尻尾をパタパタと振りながらこちらを見上げる。



「ソータよ、考えたではないか！『正気を失つて突つ込んでくるような愚か者は、その愚かな考えしかできん頭を粉々に碎いてやろう』ということか！なかなか我好みの倒し方だ！」

「うおおつ……」

「ようしゃ容赦ようしゃがまるでない……」

すると、勘違いしたケルの言葉に御者たちが引いていた。

俺は慌てて手を横に振つて、ケルの言葉を否定する。

「違う！ 違いますから！ そんな意図は全くありませんから！」

しかし、俺がいくらケルの言葉を否定しても、御者たちは怯えるような目を向けてきた。

俺はこれ以上否定すると逆効果かもしれないと思い、視線を大岩の方に向ける。

「ていうか、なんで急にこんな大岩が？ 俺が使ったのは、あくまで『空間転移』のはずなのに」

すると、ケルがこてんと可愛らしく首を傾げる。

「遠くにあつた大岩を転移させたのだろう？」

「遠くにあつた大岩？」

ケルが俺たちを大岩の裏側へと連れていった。それから、ケルは顔をくいつと回して、さつきまで俺の魔法陣が展開されていた場所を見る。

「ほれ、あそこにあつたのを移動させたのだろう？」

「大岩がなくなつてる……」

ケルの視線の先を追うと、確かにそこにあつたはずの大岩がなくなっていた。

ていうことは、ケルの言つた通り俺があれを移動させたことになる。

『空間転移』が成功した？

いや、俺が空間転移させようとしたのは、ワイバーンの翼だつたんだけど。

俺がそんなことを考えていると、サラさんが感嘆の声を漏らす。

「すごいね、ソータ。あんな大きな岩を空間転移させるなんて」

「い、いいえ、本来そのつもりはなかつたんです。ワイバーンの翼だけを空間転移させるはずでした」

「そうなのか？」

「うん。やつぱり、ハーデスの力を使うのは一筋縄じやいかないみたいだね」
さすがに一発で使えるようになるとは思わなかつたけど、想像していた以上に難しそうだ。とりあえず、『空間転移』の魔法理論とさつきの魔法の違いを分析しないと。

俺はそう考えてから、ちらつと頭が潰れているワイバーンを見る。

「ケル。そういえば、さつきワイバーンが正気を失つてるって言つた？」

ケルは頷いてから、ワイバーンに視線を向ける。

「ああ。強い恨みに支配されているように見えた。地獄で似たような目をした者を何度も見たのでな」

◆

「そういえば、御者たちもこんな所にワイバーンがいるのはおかしいって言つてたね」
サラさんは馬車付近で待つてゐる御者たちの方角を見た。

確かに、御者たちがワイバーンを見たときにはそんなことを言つていた。洞窟でもなく、山脈でもない平地。それも遠くない所に民家があるのに、正気を失つたような単独行動……

俺が腕を組んで考えていると、ケルが前足を俺の脚に乗せてきた。

「騎士の位の授与式に向かう道中で、ワイバーンの強襲……なかなか臭うではないか！」

「……ケル、なんか嬉しそうだね」

「我的大好物の愚か者の臭いがブンブンとしてくるからな！」

ケルは機嫌よさげに、尻尾をフリフリとさせた。俺はそんなケルの言動を前にして、また何か厄介な奴らに目を付けられたのかもしれないと考えてしまふのだった。

一方その頃、屋敷にてグスマンは自室の椅子に深く座り、ソータたちの授与式の招待状をつまらなそな目で見ていた。

「大魔討伐に、緑色の鬼の討伐……なるほど」

それから、グスマンはその招待状を指の先で弾く。すると、すぐ側に立つ使用人が口を開いた。

「噂では、地獄から地上へと繋がる門も封鎖したとか」

「ほほう。ずいぶんと腕が立つ者のではないか。さながら、凄腕^{すさまじ}エクソシストといったところか？まあ、その噂が本当ならな」

「捨てておけ。主役が道中で魔物に襲われて死亡するんだ。こんな授与式が開催されるはずがない」

「承知いたしました」

使用者はグスマンの投げ捨てた紙を拾ってごみ箱に放り込む。グスマンは捨てられる紙を見て、ニヤリと悪戯^{いたずら}どい笑みを浮かべる。

「呪物が壊れたときは肝を冷やしたが、逆に運がよかつた。これで俺はさらなる高みを目指せる」これまで、グスマンは邪魔な権力者や対立する貴族たちを呪物を使って消してきた。そして、呪物が壊れたタイミングで偶然受け取った餓鬼からのテレビパーをもとに餓鬼と合流して、呪物以上の力を手に入れたのだった。

そんなとき、グスマンは新たに騎士になるソータたちの噂を聞いた。噂では、ソータたちは悪魔^{あくま}信仰の組織や、悪魔たちを倒して回っているらしい。

悪魔との繋がりを持つてしまったと思い込んだグスマンは、ソータたちの次のターゲットは自分がなるかもしれないと考え、その前に餓鬼の力を使って、ソータたちを始末することにしたのだ。

少しでも自分を失脚^{しおき}させる可能性がある者は排除する。その考えは呪物を使って他の貴族たちを排除したときから変わっていないかった。

グスマンは鼻で笑ってから続ける。

「所詮^{しよせん}はエクソシスト兼B級冒険者。ワイバーンのような魔物を相手に立ち回れるはずがない。それも、怒りや憎しみ、恨みなどを悪魔たちに強化されたワイバーンだ。太刀打ちはできないだろう」

「通常のワイバーンよりも大きいですからね。護衛^{ごえい}だって手も足も出ないことでしよう。それに、他にも数体の魔物を向かわせていますからね。死体も残らないのでは？」

使用者はグスマンの言葉に同調するようにニヤリと笑う。

すると、突然グスマンの部屋の扉が慌ただしくノックされた。

「なんだ騒々しい」

グスマンが眉間に皺^{みくび}を寄せると、使用者が頭を下げてから扉を開ける。すると、そこには焦りの表情を浮かべた別の使用者がいた。その使用者は部屋に入るなり口を開く。

「グスマン様！ ソータという冒険者一行、授与式が開催される王都に到着したそうです！」

「……は？」

グスマンは一瞬言葉の意味が分からず、間の抜けた声を漏らす。

それから少しして、グスマンはふうふうっと立ち上がって、ゆっくり使用者に近づいていく。

「王都に？ な、何馬鹿なことを言つてゐる。そんなはずがないだろ？」「うう」

「い、いえ。それが確かな情報でして」

使用者の男が顔を逸らすと、グスマンはその使用者の胸ぐらを掴んで壁に叩きつける。「なぜだ！ ワイバーンを向かわせたはずだろ！ 念のために、その後も数体魔物を向かわせたはずだ！ その魔物たちはどうなったんだ、ああ!?」

「そ、そこまでは把握しておりません」

「使えん奴だ！ どけ！」

グスマンは使用者を押し倒して、苛立つたまま自室を後にした。そして、屋敷を出ると大きな離れの屋敷に早歩きで向かう。

離れに着いたグスマンは、苛立つた感情をぶつけるように激しく扉を開け放つた。

「おー！ どうなつてゐる、話と違つぞ！」

大きな離れの中にいたのは、七体の餓鬼たちだつた。床には空の酒瓶や食べ散らかした皿、宝石やお金がばら撒かれている。そして、餓鬼たちはグスマンが入ってきたのを無視して、それを取り囲んで騒いでいた。

「このつ、こいつらあ……」

グスマンは無視されたことと、願いを叶えなかつたにもかかわらず全く悪びれない餓鬼たちの態度にさらに強い怒りを抱いた。その怒りに任せて、近くにあった酒の空瓶が並べられた机をひっくり返す。

ガシャーンッ!!

離れに空瓶が割れる音が響くと、餓鬼たちがよつやくグスマンの方を見る。グスマンはそんな餓鬼たちを強く睨みつけた。

「冒険者の抹殺をお願いしたはずだ！ なぜ生きているんだ！ どうなつてゐる!!」

グスマンの言葉を聞き、餓鬼たちは恨みや怒りを増長させる能力を開花させた個体を見る。その餓鬼は魔物の感情をいじり、ソータたちに恨みや怒りの感情を向けさせるようにした。死の果てまでソータたちを追いかけるほど恨みや怒りを増長させたこともあり、魔物たちがソータたちを襲わないはずがなかつた。

しかし、ソータたちが簡単に魔物たちを屠つてしていることを知らない餓鬼は、自分の力を疑われたことが非常に頭にきて、空になつた酒瓶をグスマンに投げつけた。

「痛つ!! な、何をするんだ！」

「魔物たちなら向かわせた！ 疑われる筋合はない！ 貴様の用意した魔物が弱かつたんじやないか？」

「……弱かつただと」

すると、グスマンは顔を俯かせて、小さく肩を震わせた。

「弱いだと？ ワイバーンやそれと同等の強さの魔物たちだぞ！ 冒険者に生け捕りにさせるため

に、通常の倍以上の金を払つてんだぞ！ それなのに……確実に殺せるやうになかったのか！」

「グスマンの大声を聞いて、近くにいた餓鬼が興味なさげに口を開く。

「その冒險者が全ての魔物を殺したんじゃないのか？」

「そんなわけがあるか！ B級冒險者のエクソシストだぞ！ そんなこと、ありえんわけないだろ！」

「グスマンは唾を飛ばし、大声を出してから、頭を抱えて頃垂れる。

「……」のままでは、これまで俺がしてきたことがバレるかもしない。くそがつ、一体どうすればいいんだっ！」

「グスマンが焦つている中、餓鬼たちはこれまでと変わらずグスマンから与えられた酒や食べ物を漁りだす。

「酒、酒、酒が足りない。持つてこい。」「食い物をくれ、もつともつとよこせ！」

「金だ！ もつともつともつとよこせー。」「金になる物全てよこせー。」

「グスマンは統率^{とうりゅつ}が全く取れていない餓鬼たちを見て、小さく舌打うちする。彼は餓鬼たちの欲を満たすために湯水のごとく金を使っていた。それも餓鬼たちがなんでも願いを叶える悪魔だと勘違いをしており、自分のことを気に入つてもらえれば今まで以上の願いを叶えてもらえる——そう信じて出し惜しみする」となくお金を使った結果がこれだった。

「グスマンは歯ぎしりをして、ぶつける先のない怒りをぐつと堪^{たまへ}える。

「冒險者の抹殺に失敗したというのにまだ何かを欲すると言うのか……」つい、本当に力のある悪魔なんだろ？」

「グスマンは餓鬼たちを見て怪しむ。以前使っていた呪物なら、願い事を失敗するようなことはなかった。そして、これほどの対価を求めるようなこともなかつた。

テレパシーが使える餓鬼は疑いの目に気づいて、グスマンに声を送る。

『貢^{みが}ぎ物が足りないのが原因だ』

「こ、この声はっ、呪物が壊れたときに聞こえてきた声だー。」

「グスマンは頭に直接響いてくる言葉を前に喜び、声がどこから聞こえてくるのか必死に探し始めた。そんなグスマンの愚かな姿を前に、餓鬼たちは必死に笑いを堪えていた。

「……貢ぎ物が足りない？ これだけのものを貢じても、まだ足りんというのか？」

「グスマンは信じられないものを見る目で餓鬼たちを見てから強く睨む。

「くそつ、欲深い奴らめ」

「すると、またその餓鬼がニヤリと笑みを浮かべてテレパシーを送る。

『対価に応じての恨みしか増強できん』

「対価に応じて？ ところとは、貢ぎ物次第でいいまでも強い願いを叶えられるということなのか？」

『そういうことだ』

グスマンは餓鬼の言葉を受けて、真剣に考え込む。
それから、妙案を思いついて顔を上げる。

「授与式の二週間前に、一部の貴族たちとその冒險者との顔合わせがある。そのときに、出席する貴族たちの感情をいじって、冒險者が騎士になるのを反対させることはできるか?」

『可能だ。対価次第ではあるがな』

「ぐつ!」

グスマンは餓鬼のテレパシーを受け取り、表情を歪ませる。それから、しばらく顔を伏せて黙り込んで眉間に皺を刻んだまま顔を上げた。

「……今度は何が欲しいんだ?」

その言葉を聞いて、テレパシーを送った餓鬼は笑みを浮かべるのだった。

2 授与式とグスマンの企み

俺——ソータは王都にある大聖堂に向かっていた。どうやら、騎士の位の授与式を行う前に、本番の会場で、簡単な段取りの確認と有力な貴族たちとの顔合わせの場を設けてくれるらしい。「さつそく緊張してきたな

貴族と会うのは初めてなので、どうしても緊張してしまう。

しかし、ケルは揺れる馬車の中で、ご機嫌に戻尾を振っていた。

「ケルはあんまり緊張とかしてなさそうだね」

「当たり前ではないか。今は我らに魔物を仕向けた愚か者に会えるかもしけんというワクワクでいっぱいだ」

ケルはそう言つて無邪気な笑みを浮かべていた。ケルの笑みがただ可愛いものではないことを知つてゐる俺は、少し表情を強張らせる。

すると、俺の正面に座るサラさんが口を開く。

「それにしても、不自然なくらい色んな魔物に襲われたね」

「ええ。正直、普通ではありえないですよね」

王都に来るまでの道中、ワイバーンをはじめとする多くの魔物たちに俺たちの馬車は襲われていた。それも、襲ってきた魔物たちは、どれも正気を失っているように見えた。まるで誰かに操られているようだつた。

「ソータたちが騎士になることを良く思わない者……大体、どんなことをしている愚か者なのか想像がつくではないか」

ケルは何か企むような表情をして窓の外を見る。すると、授与式の会場でもある顔合わせの場に到着したのだろう。御者が馬車を停めた。

俺たちは馬車から降りて、授与式が行われる大聖堂を見上げる。王都にある聖堂ということもあってか、建物自体がかなり大きい。中央には小尖塔ショットンタウがあり、その左右には双塔ツインタウが聳え立つている。昔からある建造物だからか、クリーム色の壁は歴史を感じさせる見た目だった。

そんな古くからありそうな伝統的な大聖堂を前に、俺は感嘆の声を漏らす。

「おおつ、結構凄い所でやるんですね」

「そうだね、驚いたよ。こんなに立派な大聖堂は見たことないね」

歴史ある建物に驚いていると、そんな俺たちを鼻で笑う声が聞こえてきた。視線を向けると、そこにはお腹の出ている四十代くらいの男がいた。

「ふん、田舎者いなかものどもめが」

「グ、グスマン様！」

すると、御者が勢いよくその男に頭を下げた。俺は目をぱちぱちとさせてから首を傾げる。

「グスマン様？」

「俺の名前も知らんのか。冒険者は世間知らずしかおらんのだな」

グスマンは眉間に皺を寄せてそう言ってから、俺たちを見定める。

「子供と女と犬。こいつらに騎士の位を与えるなんて正気とは思えんな」

それから、グスマンはニヤニヤと嫌な笑みを浮かべて続ける。

「貴様らが騎士になることに反対する貴族たちもいる。いや……もしかしたら、ほとんどかもしけんな」

グスマンはそう言うと、笑い声を上げながら大聖堂の中へと入つていった。俺はそんなグスマンの背中が見えなくなつてから、サラさんに視線を向ける。

「こちらの言葉を何も聞かずに去つていきましたね。ただ嫌味を言いにきただけなんでしょうか？」

「どうなんだろ。さつきの人は御者さんのお知り合いですか？」

サラさんが御者を見ると、御者は慌てたように手を横にぶんぶんと振る。

「知り合いでなんて畏れ多い！　ここ数年で勢力を一気に伸ばしてきたグスマン伯爵はくしゃくという貴族です」

「伯爵……そんなに偉い人だつたんだ、今の人」

俺は先ほどの嫌な笑みと伯爵家という身分が合っていないような気がして、眉をひそめる。

すると、ケルが不思議そうな顔で俺を見上げる。

「あの男、ソータたちが騎士になることを反対する者がいると言つていたが、騎士の位の授与はどう決まっているのだろう?」

「うん、そのはずだよ。なんだろう、調子に乗るなって言いたかつただけなのかな?」

ケルの言う通り、すでに俺たちが騎士になることは決まっている。現時点で反対する人がいても、騎士の位を貰うことに支障はないはずなのだ。

サラさんは俺たちのやり取りを見て頬を搔く。

「やっぱり、貴族からすると冒險者上がりっていうのはいい目で見られないかもね」

「そういうことかもしれませんね」

俺がサラさんの言葉に頷くと、ケルが口を開く。

「ふむ。果たしてそれだけだろうか」

「どういうこと?」

「ようやく出会えたのかもしね。探していた愚か者に」

ケルは機嫌よさげに尻尾をフリフリと振っていた。ケルの生き生きとした顔を見るに、全く根拠なくグスマンを疑っているようには思えない。

……ケル、新しいおもちゃを見つけた顔をしているな。

俺が目を細めていると、大聖堂の扉が開かれ、扉の奥から不機嫌そうな男が現れた。男は俺とサラさんをじっと見てからため息を吐く。

「ソータ様とサラ様でお間違いないですか?」

「は、はい」

「それじゃあ、中へどうぞ。皆さんすでにお揃いですか?」

男はぶつきらばうにそう言つと、俺たちを大聖堂の中へと招き入れた。一斉に大聖堂の中にいた人たちが俺たちの方に視線を向ける。おそらく、皆グスマンと同程度の身分を持つた貴族なのだろう。彼らから向けられる視線に好意的な感情は一切なく、恨みの感情が強く込められているようだつた。

「なんだあの子供は。あんなのに騎士の位を与えていいのか?」

「隣の女もかなり若いぞ。とても実力のある剣豪には見えん」

「こんな奴らに騎士の位を与えてはなんんだろう……権力を持たせるわけにはいかん」

貴族たちは俺たちを睨みながら、そんな言葉を次々に口にしていた。そして、そんな貴族たちの中でただ一人、グスマンだけがニヤッと嫌な笑みを浮かべていた。

すると、サラさんが俺の耳元でささやく。

「ソータ。あんまり歓迎ムードじゃなさそうだね」

「そうですね。グスマンが言つていた言葉も本当だったみたいですね」

俺たちがそんなことを話していると、ケルがちよこちよこつと俺たちの前に回り込んで顔を上げる。

「ソータ、サラよ。そんなことはないぞ。おそらくこれには種がある」「種？」

「ふむ。せつかくなので、少しの間だけ泳がせてみる」としよう」

ケルはそう言うと、グスマンの方を見て嬉しそうに尻尾を振っていた。

もしかして、グスマンが何かしてること？

でも、なんでグスマンがそんなことをするんだろう？

そこに、グスマンが笑みを浮かべたまま俺たちの方に近づいてきた。そして、周囲にいる貴族たちを煽るように口を開く。

「皆も感じているようだが、こんなちんちくりんな子供と、華奢な女に騎士の位を与えるのは間違っている！」

グスマンの言葉が大聖堂に響くと、俺たちを見る他の貴族の目が一層厳しいものになった。また俺たちを非難する声が聞こえ始め、グスマンが満足げな顔をして俺たちを指さす。

「そもそも貴様らの実績というものが胡散臭い。悪魔や地獄からの侵略者を退治したと言ったが、それは本当か？ 何か証拠はあるのか？」

「証拠はありませんけど、俺たちの戦いを近くで見ていた人たちはいます」

俺は少しむつとして言い返すが、グスマンはそんな俺のことを鼻で笑う。

「そんなの口裏を合わせればいいだけではないか。そもそも、エクソシスト風情が騎士の位を貰うなんておかしいのだ」

「エクソシスト？ 私たちは冒険者ですけど」

サラさんはそう言って首を傾げる。

エクソシストというのは、悪い憑きものが憑いたときに払ってくれる存在だ。だから、仮に俺たちがエクソシストだとしても、馬鹿にしたような態度を取られることはないと俺たちは思っている。

「ほんっ、こんな華奢な奴らが冒険者なわけがないだろう。どうせ、冒険者ギルドもグルになつて実績をでっちあげたのだろうな。それ以外に考えられん。仮にも聖職者でありながら権力に縋るとはみつともない」

グスマンが何か言う度に、周囲の貴族たちの俺たちを見る目が険しいものに変わっていく。
……何かがおかしい。

そう気づきながらも、あまりにもアウェーすぎる状況を前に、俺は言い返すことができずにいた。
すると、グスマンが今の状況に気をよくしたのか、勝ち誇ったような笑みで言葉を続ける。

「こいつらに騎士の位を与えるだけの力があると思う者はいるか？」

グスマンが片手を挙げてそう言うと、貴族たちは俺たちを睨みながら黙り込む。

それから、歯ぎしりをさせていた一人の貴族が声を荒らげる。

「辞退しろ！ 実績をでっちあげて、騎士の位を貰うなど許せん！」

すると、その貴族の声を皮切りに、色々な所から俺たちを非難する声が上がっていく。

「そうだ、そうだ！ このエセエクソシストが！」

「今すぐこの場から立ち去れ！ 貴様らに与える位などないわ！」

ボルテージが最高潮さいこうしきゅうに上がった頃、グスマンが貴族たちを軽く宥めなだめてから、貴族たちの言葉を代表するように口を開く。

「どうやら満場一致のようだな。授与式を辞退しろ、権力に縛る醜いエクソシストが」

グスマンは得意げに首を搔つ切るジエスチャーをしてニヤッと笑う。すると、そんなグスマンの言葉を聞いて、周囲の貴族たちがまた声を荒らげる。

「「「辞退しろ、辞退しろ、辞退しろ！」」

貴族たちのそんな声を前に、俺は思わずたじろぐ。サラさんが庇かばうように前に立つて、俺の方を振り向いた。

「ソーダ、下がっていて。少し雰囲気がおかしいよ」

「俺もそう感じていました。異様な空気になっていますね」

日々感情のままに言葉を発しているように見えるが、どこか統率が取れている。まるで誰かに操られているようだ。

「ふむ。そろそろ頃合いだな」

「ケル？」

「少しの間だけ待つていてくれ。すぐにこの状況を開してくれよう」

ケルはそう言い残すと、嬉しそうに尻尾を振りながら貴族たちのもとに走つていった。

この状況をなんとかするつて、一体どうするつもりなんだろ？

ケルが何をするのか見ようと視線を向けると、なぜかケルは貴族たちの足元に体をこすりつけてじゃれ始めた。

「え？ ケ、ケル？」

初めはふざけているのかと思つて見ていたが、ケルがじゃれついた貴族たちは次第に正気を取り戻していくようだった。

「あれ？ 私は一体何を？」

「なぜあれほど騎士になるのを反対していたんだ？」

貴族たちがぽかんとしている中、ケルは次々に他の貴族たちの足元にじやれていく。そして、その度に貴族たちは正気に戻つていき、辞退しろコールが徐々に小さくなつていった。

「ほら、早く辞退しろ！ 辞退しろ！」

ケルはグスマン以外の貴族たちを全て正気に戻した。しかし、それでもグスマンは周囲との温度差に気づいていないのか、一人になつてもひたすら「辞退しろ」コールを浴びせてくる。

それからしばらくして、周囲にいた貴族の一人が気まずそうに口を開く。

「えっと、グスマン伯爵。ソータくんたちに騎士の位を与えるというのはすでに決まっていることだから」

「辞退しろ！　辞退しろ！　辞退し……え？」

グスマンは指摘されて、ようやく自分が一人きりで「辞退しろ」コールをしていたことに気づいたようだった。

四十を超えた男が子供と女性に対し、前めりで声を張り上げる。そんな光景が異様に映つたのか、他の貴族たちはグスマンの行動に引いていた。そして、グスマンが黙ったことで大聖堂は一瞬しんとしてしまつた。

すると、ケルがグスマンに近づいていき、嬉しそうな表情で顔を上げる。

「ふむ。大の大人が一人で騒いで駄々をこねる……まるで、子供のようではないか」

ケルはヘツヘツという息遣いをして、ご機嫌に尻尾を振っていた。

「なっ!?　こ、このつ！」

グスマンは小さく言葉を漏らしてから、顔を真っ赤にさせる。それから、肩をブルブルと震わせて貴族たちを睨んだ。

「お前たちもさつきまで反対だつただろうが！　なぜ急に黙り込む！　こんな平民のガキたちが権力を持とうとしているんだぞ！　悔しくないのか、憎くないのか!!」

他の貴族たちはグスマンの言葉に首を傾げ、目をぱちぱちとさせた。

「別に、実力のある者が騎士になるのだからいいのではないか？」

「授与式に参加する貴族が辞退を迫るというのはいかがなものか」

「悔しさも憎さも特にありませんね。なぜそこまで強く辞退を迫るのでしょうか？」

グスマン以外の貴族たちは、極めて落ち着いた様子でそんな言葉を口にした。まるでさつきとは別人のような貴族たちを前にして、俺は説く。

「ちょこちょこつと足元にやつってきたケルに、届んでから声を潜めて言う。

「ケル。一体、何が起きてるの？」

「一種の呪いのようなものがかけられていたのだ。だから、我がそれを解いてきた」

ケルはなんでもないことのように、そう口にした。

呪い？

さつきまでやけに攻撃的だったのは、その呪いみたいなものが原因ってことなのか。でも、ケルって呪いを解くようなことしてたつけ？

すると、サラさんが何かに気づいたような声を漏らす。

「もしかして、さつき貴族たちにじやれついてたのつて……？」

「左様。あのくらいの呪いの解除など容易い、容易い」

ケルは笑みを浮かべて得意げに首を反らした。

……あれつて、ただ遊んでただけじゃなかつたんだ。

どうしてもケルがじやれていた光景と、呪いの解除という言葉が結びつかない。

顔を真つ赤にして貴族たちに叫んでいるグスマンをケルがちらつと見る。

「まあ、一人だけ呪いをかけられてはいよいよだつたがな」

「呪いをかけられてなくて、必死に俺たちが騎士になろうとしていることに反対している……もし

かして、魔物を俺たちに仕向けたのもグスマンなのかな？」

「その可能性が極めて高いだろうな。ソータたちが騎士になると困ることでもあるのだろう」

俺とケルがそんな話をしていると、サラさんも屈んで口を開く。

「私たちが騎士になつて困ることは、もしかして地獄の者との繋がりがあるつてこと？」

「詳しいことは分からんが、呪物か地獄関係だろうな」

俺はケルの言葉を聞き、グスマンを見る。どうやら今回もケルが好きな愚か者が関わっているみたいだ。そうなると、グスマンを放つておくことはできないだろう。

「我らの実力も測れず、呪いを解かれたことに気づかない……非常に愚かな者とみた」

ケルは目をキラキラとさせて、尻尾を勢いよく振っていた。

俺たちが放つておいても、ケルが好物である愚か者を逃がすはずがない。

「くそつ！ な、なんだ！ 何がどうなつてているんだ！」

グスマンは取り繕うことをやめて頭を搔きむしり、取り乱していた。

すると、一人の貴族がグスマンを白い目で見ながら、俺たちに近づいてきた。

「ソータくん、サラさん。変に騒ぎ立ててしまつて申し訳ない」

俺は貴族に謝られたことに少し驚きながら、手を横にぶんぶんと振る。

「い、いえ、気にしてませんから」

「本当に申し訳ないことをした。なぜあんなことを言つたのか、心当たりがまるでないんだがね」

貴族の男は俺から視線を逸らして、考え込むように眉をひそめていた。おそらく、本当にさつきまで辞退コードをしていた理由が分からぬのだろう。それだけ、グスマンが強い力で他の貴族たちを操つていたことになる。

同時に多くの人の心を操る呪物か、地獄からの使者——グスマンだけならただ面倒な相手で済むけど、その背後にある者は結構厄介なのかもしれない。

「私たちは平氣ですので、授与式当日のお話を聞かせてもらつてもいいですか？」

「ああ、そうだったね。それでは、奥の方で授与式当日の流れを説明しよう。こちらに来てくれ」

俺たちはその貴族に誘導されて、大聖堂の祭壇さいだんへと歩いていく。

「ま、待て！」

すると、またすぐにグスマンの大声が大聖堂に響いた。

「実力のない者を騎士にしてどうすると言つんだ！ 皆もどこかで悪魔や鬼の討伐をしたということが疑つてゐるはずだ！ 現実的に考えてありえないだろ！」

グスマンの叫びを聞いて、周囲にいた貴族たちはなんとも言えない表情をした。

確かに、俺たちの実績は現場を見ていない人からすれば、嘘ではないかと思うようなものだ。ここにいる貴族のうち一定数は、俺たちの力を認めていないのかもしれない。

俺がそう考えていると、ケルがグスマンの方に振り向いた。

「実力があることを証明できればいいのだな？」

「ん？ な、なんだこの犬。なんで喋ってんだ？」

グスマンがケルが喋ったことに驚いていると、ケルは得意げな表情を浮かべる。

「なんでも持つてくるがいい。どんな魔物の討伐でもしてくれよう。そして、ここにいる全員にソータたちの力を認めさせてやろうではないか」

グスマンは一瞬おでこに青筋あおずじを立ててから、ハツとした顔で俺を見た。それから、にやりと嫌な笑みを浮かべてケルに視線を戻す。

「ほう、大きく出たな。そう言うからには、失敗したら騎士を辞退してもらうぞ」

「ふむ、そうくるか。ソータよ、どうだろうか？」

ケルがこちらに振り向いた。

一応確認を取つてくれてはいるが、ケルはすでにグスマンの提案を受け入れるつもりなのだろう。それが見て取れるほど、ケルは前のめりになっていた。

正直、緑鬼の討伐と地獄の門を空間転移できたのは、ハーデスの力があつたからだ。だから、今

回騎士の位を貰うことになつたのも、ハーデスの力も含めて評価されたからではないかと考えていた。俺の実力を正しく評価してもらうためにも、グスマンからの提案には乗るべきなのだろう。グスマン以外の貴族たちに俺たちの力を認めてもらうためにも。

俺はそう考えて力強く頷く。すると、ケルがグスマンに視線を戻して尻尾をぶんぶんと振つた。

「だそうだ。よかつたではないか、駄々をこねた甲斐かいがあつたな」

「こ、このっ！ 覚えている、クソ犬とクソガキが!!」

グスマンはそう言い残すと、怒りをそのままに大聖堂から飛び出して行つてしまつた。

一体、どんな無茶ぶりをしてくるのだろう。

そんな俺の心配をよそに、ケルは新しいおもちゃを見つめるような表情で大聖堂の扉を眺めていた。



「くそくそくそつ！ あいつら、俺を馬鹿にしゃがつて！」

グスマンは屋敷に戻るなり、真っ先に餓鬼たちがいる離れへと向かつた。

前回ソータたちの抹殺が失敗に終わったということもあり、今回は以前の数倍の貢ぎ物を用意した。餓鬼たちに用意するよつ言われたのは、多くの高価な酒や食べ物。そして、宝石や美術品の

数々だった。前に用意したのより数段高価な物を要求されたが、グスマンは必要経費だと自分に言い聞かせて大枚をはいた。

しかし、結果は大失敗に終わった。それどころか、多くの貴族たちの前で大恥をかくことになってしまった。グスマンはその怒りをぶつけるように、離れの扉を勢いよく開け放った。

「おい！ どうなっているんだ!! 今日は上手くいくって話だつただろー！」

グスマンの怒号^{どじょう}が離れ中に響くと、酒を飲んでいた餓鬼の一人が驚いて酒瓶を落としてしまった。高級な酒が半分以上も床にこぼれる様子を見て、グスマンは苛立ちで肩を震わせる。

「……一体、その酒がいくらしたと思つていいんだ？」

そんな以前よりもキレているグスマンを前に、餓鬼たちは静かになる。すると、グスマンは入り

口付近の壁を力いっぱい殴り、餓鬼たちをキッと強く睨む。

「また失敗だつたぞ！ 何が『権力に絶る欲を高めること』で、他の貴族たち皆が俺の意見に賛同する』だ！ 俺の意見に賛同したのなんて始めだけだつたぞ！」

グスマンの怒鳴り声を聞いて、餓鬼たちは今回の作戦の実行役である餓鬼の方を振り向く。

一斉に視線を集めた餓鬼は力なく首を横に振る。

「そんなことはないはずだ。俺はやることはきちんとやつた」

「じゃあ、なんであいつらは途中から俺の意見に賛同しなくなつたんだー！」

「……田の前でその呪いを解除されたんじやないか？」

グスマンは力なく笑う餓鬼の言葉に歯ぎしりをして、その餓鬼を強く睨みながら口を開く。

「俺の目がそんなに節穴なわけないだろー！ 怪しい動きをしている奴なんて一人もいなかつたぞー！」

それから、グスマンは頭を搔きむしって声を荒らげる。

「くそっ、全く願いを叶えてくれないではないか！ 俺がくそりつき込んだと思つてねんだー！」
すると、そんなグスマンの言葉に答えるように、テレパシーを使える餓鬼の言葉^がグスマンの頭に流れてきた。

『欲が満たされない』

「満たされない？ は？ どう、どう」とだ?

グスマンは天井を見上げて声をよく聞こうとする。すると、以前よりもどこか元気のない声がテレパシーとなつて、グスマンの脳内に直接響く。

『欲を満たしてこそ、本来の力を發揮する。まだ貢ぎ物が足りない』

『何を馬鹿なことを言つていいんだ。これだけの物を用意させて欲が満たされないはずがないだろつ』

グスマンは訝しげな表情を浮かべて辺りを見渡す。そこによつやくグスマンは餓鬼たちの様子が以前と違つていたことに気がついた。

『酔えない……全然酔えない。くそつ』

『食べ物が取れない！ なんで食い物が逃げるんだあー』